

『Six Sex 五条会次期総代「結月」』

著：西野 花

ill：北沢きょう

食事を終え、風呂に入ると、九時を過ぎていた。階下の車寄せに車が停まる気配がし、窓から見下ろしてみると、陣介が帰宅したところだった。その後ろには佐門の姿も見える。陣介に同行していたらしい。

「————」

ここに来て、結月は急に緊張し始めた自分に気づく。これまでは平気だと自分に言い聞かせ、実際にそう思っていた。けれど、これから自分が抱かれるのは撮影で呼ばれた男優などではなく、本物の極道の男。

「大丈夫、だ」

怖じ気づいたって、今更もうどうにもできない。逃げられないし、逃げるところだってない。ましてや自分は、逃げないと決めた。

それでもしばし落ち着かない時間を過ごし、やがて時計の針が十時を指す頃、結月は部屋を出て、昼間教えられた陣介の寝室へと向かった。扉の前でおずおずとノックをすると、反応がない。開けてみると、まだ陣介は来ていない様子だった。無人の寝室の中は整えられ、枕灯だけがついている。

「.....」

真新しい浴衣の胸元を意味もなく整え、結月は所在なくベッドに腰を下ろした。すると部屋の外から足音が聞こえてきて、思わず身体を強ばらせる。ドアが無造作に開いた。

「よう。いい子にしてたか？」

「あ.....、はい」

陣介は黒の単を身につけていた。彼は無造作にベッドに乗り上げると、まるで当然のように結月の細身の身体を抱き寄せる。男の匂いがして、くらりと頭の芯が痺れた。

「どうした、そんなに硬くなって」

「あ.....」

胸元から無造作に手を差し入れられ、直接肌をまさぐられる。触れられる感覚にびくん、と肩が震えた。掌で胸を撫で上げ、小さな突起を擦るように撫でられると、そこがじん、と熱を持つ。

「お前はもう、俺の可愛い情婦（おんな）だ」

「ん、ん.....っ」

口づけられ、煙草の味のする舌が口腔に滑り込んできた。敏感な粘膜を舐められると腰の奥がずくん、と疼き、結月は身体の内側から生まれる興奮に支配されそうになる。思わず自分から顔を傾け、ぴちゃぴちゃと舌を絡め合った。

「ＡＶなんか目じゃねえほどの快感を教えてやる」

浴衣の帯が解かれ、白い素肌が露わになる。すると、撮影の時にはついぞ忘れていた羞恥が甦ってきた。

「ああっ.....！」

下着の中に手を入れられ、股間のものをやんわりと握られ、揉みしだかれる。その感覚は強烈だった。

「気持ちがいいのか？」

「はっ.....、い、あっ.....」

巧みな五本の指で張りつめたそれを擦られ、まるで搾るように根元から揉み上げられる。結月の腰はその度にびくびくと震え、たまらずに浮いた。

「素直ないい身体だ。もっと悦ばせてやるからな」

その時、寝室のドアが規則正しい間隔でノックされるのを聞いた結月の意識が、はっとそちらに向かう。陣介はそれを待っていたかのように、外にいる者に向かって声をかけた。

「入れ」

「え.....っ」

部屋に入ってきたのは佐門だった。彼は結月が陣介に組み伏せられている姿を見ても、少しも表情を変えずにそこに佇んでいる。

「.....総代、これは...っ」

「結月よ」

陣介は結月の下着を引き下ろしてしまうと、その両脚を掴み、佐門に向かって広げてみせた。恥ずかしい場所を晒されてしまい、消え入りそうな羞恥が結月を襲う。

「お前は俺が、立派な極道に育ててやる。まずはお前に、忠実な犬を与えてやろう」

「い、ぬ.....？」

「佐門」

陣介が声をかけると、彼は上着を脱いでベッドへ上がり込んできた。もしかして、と思っていると、その手が膝の内側にかかる。佐門はまるで当然のようにそこに身をかがめ、結月のそそり立つものをためらいもなく口に含んだ。

「……っあ、アああ————…っ」

下半身が燃えるような快感に包まれる。鋭敏なものは強く弱く口中で吸われ、ねっとり舌に絡みつかれた。たちまち汗を刷いた内股がぶるぶると震えて快楽を訴える。

「あっ、やっ、あんんっ」

背後から陣介が結月の乳首を弄んできた。ぷつんと尖った突起を指先でくりくりと弄られ、時折押し潰されるようにして刺激される。

「あ、あっ……、ひっ、あんん……っ」

撮影でも、複数の男達と絡むことは何度もあった。けれど、手管に長けた男優達よりも、この二人のほうがよほど結月を追いつめてくる。本気でこちらを責めようとする意志のようなものがあった。彼らは、結月を心底から屈服させようとしている。そんな愛撫に、結月は感じずにはいられなかった。

「お前はAVなんかに出てたからって、ちょっとばかり色事には長けているつもりでいたかもしれないがな————。あんなもの、俺達極道にしてみりゃ子供の遊びみてえなもんよ。これからそいつを、じっくりと教えてやる」

背後から陣介に首筋を吸われ、耳孔を舌先で犯されながらそんなことを囁かれるうちに、結月の肢体はまるでバターのように溶けていった。

「あっ————あ、ああああ……っ」

彼らが結月を抱くのは初めてのはずなのに、特に弱いところを熟知しているかのようだった。佐門の指先が先端を剥き出しにし、熱く濡れた舌先がぬるぬると這い回る。砕けてしまった腰が快感のあまり不規則な痙攣を繰り返した。

「だ————め、アっ、それ、それだめっ……、んああアっ」

これまでのセックスとは比べものにならないほどの快感に、結月は半ば本気で怯えてしまう。こんな愉悦をずっと与えられたら、きっとおかしくなってしまう。何か、別のものに変えられてしまいそうだった。

けれど二人の極道はそんな結月の逡巡などお構いなしに責め立ててくる。陣介の巧みな指先に虐められ、結月の胸の突起はすっかり朱く膨らんでしまっていた。乳暈をくすぐられると、突起が触れて欲しくてじんと疼く。股間をいたぶられる刺激が体内で混ざり合い、ひとつの大きなうねりが結月を支配しようとしていた。

「んんんんっ！」

ふいにきゅうっと乳首を摘まみ上げられ、捏ねられて、鋭い快感が胸の先から全身へと駆け巡る。もう、とうに限界近くまで追いつめられていた結月は、その刺激で達してしまいそうになった。だがその瞬間、佐門に根元を強く縛められ、吐精を押しとどめられてしまう。

「うああっ、あっ、ああ……っ」

「まだイかしちゃやれねえな」

「あっ、そん……なっ、ああっ」

イかせて欲しい、と結月は全身で訴えた。それなのに、張りつめて苦しそうに震える屹立には、佐門の舌が容赦なく這い回る。陣介の指は乳首のみならずいたるところに伸びていた。脇腹や腋の下まで虐められて、仰け反った肢体がひくひくとわななく。

「ひい————あっ、ああああ……っ、い、いく、もお、いかせて、くださ……っ」

今にも身体が火を噴きそうな快感に打ちのめされ、結月は身も世もなく喘ぎ、哀願していた。これ以上焦らされたら、本当におかしくなってしまうそうだった。

「そろそろいい頃合いだろう。佐門、イかしてやんな」

陣介がそう言うと、根元を圧迫していた指の感触が消え、忘れかけていた熱い射精感がカアッと込み上げてきた。その強烈さに、思わずああっ、と嬌声が零れる。畳みかけるように佐門に強く吸われ、腰の奥から何か引きずり出されるような快感に悲鳴が溢れた。

「ああ……っ、で、る、ああああ————…っ、～～っ、っ」

切れ切れの、時折声にならない嗚咽を漏らしながら、結月はたっぷりと堰き止められたそれを佐門の口の中に放ってしまう。吐き出している間も容赦なくしゃぶられてしまって、結月は咽び泣きながら二度、三度と絶頂を極めた。

「はっ……、ああ、あ……っ」

ようやく出し終わっても、濃厚な余韻に身体の震えが止まらない。滲んだ視界の中に、佐門が口元を拭いながら結月の股間から顔を上げる姿が目に入った。けれど、頭の芯がぼんやりとしてうまくものが考えられない。

「どうだ佐門、こいつの味は」

「……淫らな味です」

真面目な顔で言われてしまうと、なんだかいたたまれなくなる。陣介は佐門のその答えに笑うと、力の抜けた結月の身体を抱え上げた。

「そいつに掴まってな」

立て膝の姿勢で目の前の佐門に腕を回すと、彼はしっかりと抱き留めてくれる。その力強さに思わずどきどきと胸が高鳴った。

「.....あっ」

双丘を押し開かれて、最奥の蕾に無骨な指が押し込まれる。内壁を押し広げながら解していく陣介の指に、思わず佐門の腕を強く掴んだ。

「は.....っ」

じんわりとした熱が腰の奥に生まれていく。意識していないのに中の指をひくひくと締めつけてしまう結月の肉洞は、陣介を満足させたようだ。

「いい孔だ」

「んっ」

ぬるん、と引き抜かれて、内壁が物欲しげに震える。先ほどの濃厚すぎる前戯のせい、結月の肉体は男根を欲しがっていた。理性も麻痺しかかかっていて、ねだるように尻が揺れてしまう。

「入れるぞ」

ぽってりと膨らんだ入り口に押し当てられる凶器の先端は火傷しそうなほどに熱く、思わず喘いでしまう。ぐぐっ、肉環をこじ開けられ、長大なものが押し入ってきた。息が止まるような感覚。

「ア————...、あっ！」

佐門の腕の中で結月の背中が反り返る。陣介のものはずぶずぶと音を立てながら奥まで突き進んできた。媚肉を擦ってくる男根の刺激は縦毛立つほどの快感をもたらしてくる。

本文47P～56Pから抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>